

大学生の Egogram—第2報

—学業との関係—

松 波 慎 介

A study on the relations between Egogram and study of
students in Kogakuin University

Shinsuke Matsunami

1. はじめに

筆者は、工学院大学研究論叢第26号において本学の学生を対象として Egogram 分析¹⁾に基づいて学科別・入学年度別あるいは再履修生と正規受講生の別で、そのパーソナリティ特性や対人態度について総体的な考察を試みた。

その結果、再履修生の平均 Egogram¹⁾—以下E・Gと略す—に正規受講生とはちがった幾つかの行動特性をみる事ができた。それは構造的に Child の主導型比率が顕著に高いため、自己内部からの欲求や衝動に左右されやすく現実を見失いやすいこと。機能的には Critical Parent の低さが目立ち Nurturing Parent の優位比率が著しく高いため、自他を律することに甘く理想や目標意識が希薄でけじめがなく状況に流されやすい。また、合理的な状況把握や適切な行動選択のためのコントロール機能を司る Adult の自我機能が低いなどの傾向が伺えた²⁾。

しかし、この考察においては、保健体育理論の1教科において再履修を受講している者のみが対象となっていたために、学業修得不良の学生として取り扱うことは不適切であった。また再履修生の数が少ないために学科別・年度別等で比較分析することができなかった。

そこで、今回は本学の教務課で記録している学生個々の過去1年～3年間の学業成績・単位修得状況集計表をもとにして単位修得状況の良好な学生と不良な学生とを選別し、これら両群のE・Gを比較し分析することにより、TA理論³⁾に基づいて自我構造的、自我機能的にみた行動特性のちがいを明確にしようと試みた。

註

- 1) Egogram は1972年に Dusey によって創案された。彼はどの自我状態をどの程度表出するかは個人により違い、それがその人のパーソナリティや生き方を象徴すると考えた。このような人の対人交流の中に表示される行動特性をその基となる自我状態の表出頻度の違いによって説明し、分析するために五つの機能的な自我状態の表出頻度を数量化しグラフに示したものを Egogram という。
- 2) 松波慎介「大学生の Egogram に関する考察」工学院大学研究論叢26号 p. 191~192 1988
- 3) Transactional Analysis の略で、Eric Berne がフロイドの精神分析のエッセンスを簡便な分析理論として実用化したものである。構造分析、交流分析、ゲーム分析、脚本分析の四つの分析と、その理論的背景をなす幾つかの基礎的概念により構成されており、それぞれの理論体系を順を追って学び、分析することにより自己理解と自己変革を可能とする心理療法の一つで人間関係分析の体系である。

2. 対象及び方法

1986年度から1989年度の各年度に筆者の保健体育理論を受講した工学院大学の学生を調査分析の対象とした。

その内訳は、機械86年度生91名、建築87年度生90名、機械88年度生40名、化工88年度生30名、建築88年度生75名、電気89年度生64名、情報89年度生29名、建築89年度生44名、合計463名であった。

また、これらの対象学生を学業成績・単位修得状況集計表より各学科の入学年度別に過去1～3年間に修得した単位数、必修不合格科目数、評定値順位などから学業優良群と学業不良群とに分けることとした。なお、各学年、各学科によって学業修得の基準や修得可能単位数がちがうためにその修得状況の偏差が大きいため、個々の状況に合わせて表1のような基準で対照群を分けた。

TA理論に基づいてE・G分析を行うため筆者担当の保健体育理論受講期間中に質問紙法による九大式E・G Check List—以下九大式E・Gと略す—を実施した。

この九大式E・G調査で得た五つの機能的自我状態¹⁾、CP, NP, A, FC, ACの得点をもとにCPとNPの得点を加えてP得点、FCとACの得点を加えてC得点、A得点を2倍してA得点とし、各学科の入学年度別にPACの平均得点を出した。これによってTA理論でいうParent—P²⁾—、Adult—A³⁾—、Child—C⁴⁾—の三つの構造的自我状態に配分されるエネルギー量を比較することにより学業優良群と学業不良群の両群間の自我構造的なちがいを示そうとした。

また、各学科・各入学年度別の対照群毎にCP, NP, A, FC, ACの平均得点を出し(表2)、これをもとに平均E・Gプロフィールを求めた。このプロフィールに表れ

表1 対照群選別の基準

学科・入学年度	学業優良群			学業不良群		
	修得単位数	必修不合格数	n	修得単位数	必修不合格数	n
機械86年度	(評定値順位30位以内) 13			(中途退学者) 29		
建築87年度	95以上	0	14	80以下	4 以上	14
機械88年度	50以上	0	14	40以下	2 以上	8
化工88年度	53以上	0	11	45以下	2 以上	9
建築88年度	45以上	0	14	38以下	4 以上	12
電気89年度	55以上	0	17	40以下	3 以上	14
情報89年度	50以上	3 以下	8	25(45)以下	4(5)以上	9
建築89年度	60以上	0	14	50以下	3 以上	10
TOTAL	—	—	105	—	—	105

* 機械86年度生については過去3年間に中途退学した学生と、3年までの評価値順位が上位の学生に分けて比較した。

* 87年度生は過去2年間のデータ、88,89年度生は過去1年間のデータを基準とした。

る五つの機能的な自我状態、Critical Parent—CP—、Nurturing Parent—NP—、Adult—A—、Free Child—FC—、Adapted Child— AC— の相対的なエネルギー分布より学業優良群と学業不良群の自我機能的なちがいを示そうとした。

註

- 1) Berne は、自我状態 —Ego State— を『現象的にはさまざま心理的反応様式の一貫した一つのシステムであり、機能的には一組の一貫した行動パターンである。より実際にいえば一つの心理的反応機式のシステムで、それに関連した一組の行動パターンを伴うものである。』と定義し、個人の人格には構造的に三つの自我状態が存在し、機能的には五つの自我機能として捉えられるとした。
- 2) 主に親または他の養育者から教えられたり、取り入れたりした態度や行動から成り立っており、価値判断、道徳、倫理感に基づく言動として表れる。これには機能的に Critical Parent と Nuturing Parent の二つの面がある。前者は人の行動を制限するために罰したり、非難、叱責を行う厳しい父性的な態度に特色があって、偏見的であったり、押しつけ的な一面を持つ。後者は人を思いやったり、いたわったり、世話をやく保護的な優しい母性的態度に特色があり、甘やかしたり、おせっかいな一面を持つ。
- 3) 我々の人格の中で事実に基づいて物事を判断しようとする理性的な部分である。これは

表2 年度・学科別のE・G平均得点

学科・年度	対照群	CP	NP	A	FC	AC
機械86年度生	学業優良群	9.9	13.5	11.9	11.3	9.2
	学業不良群	10.3	13.9	10.9	12.6	11.3
建築87年度生	学業優良群	9.8	12.1	11.5	12.4	11.7
	学業不良群	6.4	12.1	9.5	10.6	13.0
機械88年度生	学業優良群	10.9	12.4	12.5	12.2	9.5
	学業不良群	7.3	12.0	8.8	13.4	9.3
化工88年度生	学業優良群	10.0	11.7	11.4	9.5	12.3
	学業不良群	7.0	9.8	10.3	11.6	8.3
建築88年度生	学業優良群	7.6	13.6	13.5	12.5	7.4
	学業不良群	8.0	13.3	10.3	11.9	13.4
電気89年度生	学業優良群	8.9	11.1	12.9	12.7	10.9
	学業不良群	7.0	13.7	11.6	13.9	8.3
情報89年度生	学業優良群	10.6	11.4	10.8	12.1	10.8
	学業不良群	8.6	13.0	10.0	15.0	7.9
建築89年度生	学業優良群	10.7	12.7	12.7	12.8	8.2
	学業不良群	10.2	13.2	11.5	14.1	13.0
TOTAL	学業優良群	9.7	12.3	12.3	12.0	9.9
	学業不良群	8.1	12.7	10.4	12.8	10.7

ータを処理するコンピューターのような働きをし、感情に支配されず客観的、合理的に「今、ここ」の状況に対処できる。

- 4) 主として感情や衝動から成り立ち、我々の人格の中にあって幼児的な姿を保っている部分である。この自我状態は、人生早期の体験や、それに対応するために身につけた反応の様式なども含まれており、親の影響によって生来的な姿が変革する。この親の影響の度合により便宜上自由なFCと順応したACに分けられる。前者は、しつけなどによる親の影響が最小にとどまり、生来の自然の姿に近い形で振る舞う部分で、本能的で、自己中心的で攻撃的であるとともに、好奇心に富み、直観的なひらめきや空想力を発揮する。後者は、生育過程で親の影響を強く受けて形作られており、周囲の愛情を失わないために、その期待に沿おうと

して用いたさまざまな適応の様式も含まれている。本当の感情を抱えていい子になったり、現実を回避して依存的になったり、自閉的になったりする。

3. 結果と考察

九大式E・G調査の結果をもとに各学科・各入学年度毎に学業優良群と学業不良群の両群を対照させて PAC 平均得点を棒グラフに、平均E・Gを折れ線グラフのプロフィールに表した。これらをもとに入学年度の古い順に両群のE・G特性を自我構造と自我機能の両面から考察し、行動特性のちがいについて推察してみたい。

1) 機械86年度生について

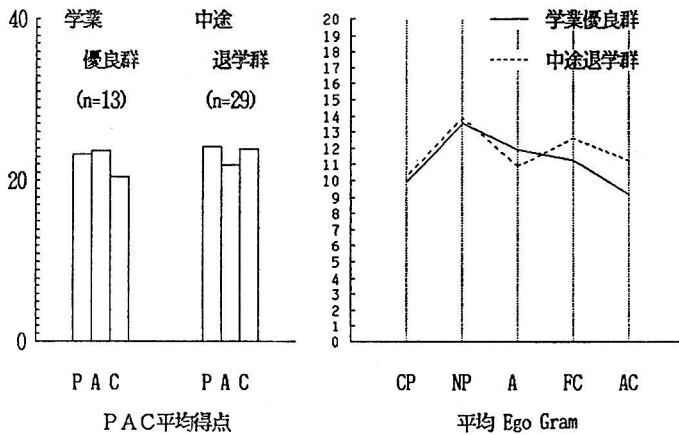


図1 機械86年度生

構造的にみると学業優良群では約8% A>CとなったCボトム型を示すのに対し、学業不良群では約5% C>AとなったAボトム型を示している。

機能的にみるとPの自我機能であるCPとNPにおいては学業優良群と学業不良群にほとんど差はない。平均E・Gプロフィールでは学業優良群はNPをピークとする右下がりの山型、学業不良群はNP、FCを山とするM型となっている。

〔考察〕

表1にもあるようにこの調査対象群は他の調査対象群とは異なった学業修得の基準によって学業優良群と学業不良群を分けている。これはこの調査対象者の中から4年までの間に多くの中途退学者が出ていたため、中途退学者群と評定値30位内の学業優良群との行動特性のちがいをみようとしたためである。

学業優良群は構造的に明らかなCボトム型を示しており、E・Gプロフィールも右下がりとなっている。従って Child 主導による自己内部からの欲求や衝動に左右さ

れて状況判断を狂わすことは少ないものと思われる。

中途退学者群はAボトム型になっており自我構造的には思春期型と言える。したがって冷静な判断力や問題解決の能力が低いために Parent の理想と Child の自己欲求に挟まれて葛藤、混乱を生じ、現実在即した行動選択に困難さを生じる傾向がやや見受けられるものの、顕著な傾向とはいえない。

2) 建築87年度生について

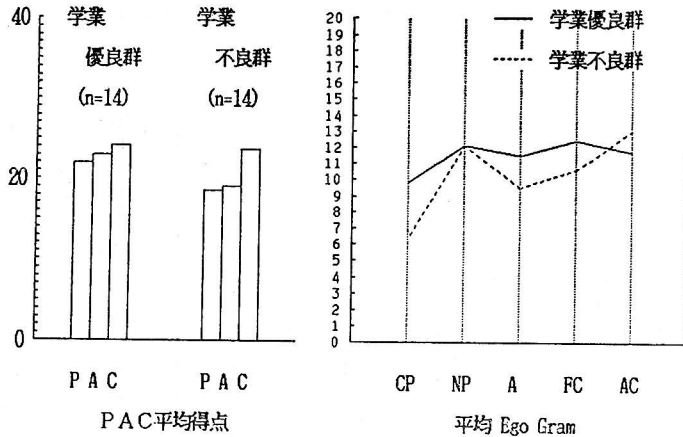


図2 建築87年度生

構造的には学業優良群に比べ学業不良群のP, Aが極端に低値を示しており、その差は約9~10%にも及んでいる。そのため学業不良群において際立ったC主導型を示す。

機能的には学業不良群の Parent においてCPの得点が目立って低く、対学業優良群で約17%低い。また Child の自我機能において学業優良群ではFC > ACのプロフィールを示すが、学業不良群ではAC > FCとなっており、ACをピークとするN型のプロフィールに近い。

[考察]

学業不良群は自我構造的には極端なC主導型を示しているため Child の自我状態がいつも主導権を握りやすく、客観的な事実にもとずいた状況判断に欠け、感情的な雰囲気流されやすい傾向が伺える。

また平均E・Gからみると学業優良群に比してCPとAが著しく低く、AC > FCとなっているため主体性に欠けた依存的受動的な傾向や、自他規制に弱くルーズな傾向、場当たりずさんな傾向が比較的強いように思われる。

3) 機械88年度生について

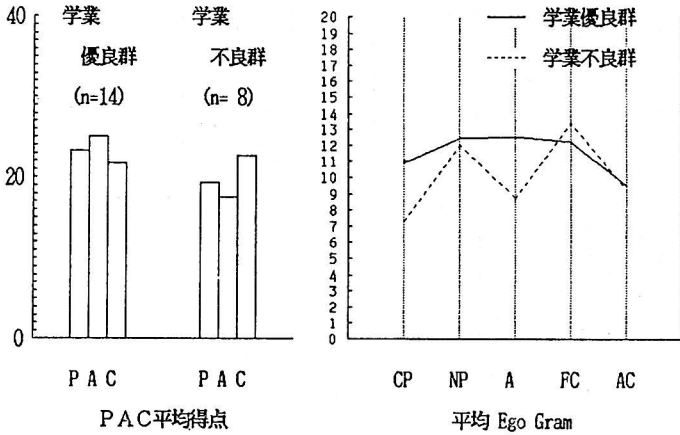


図3 機械88年度生

構造的には学業優良群においてはCをボトムとするA主導型になっているのに対し、学業不良群では学業優良群に比してP得点が約10%、A得点が約19%と著しく低値で、AをボトムとするC主導型を示す。

機能的には学業不良群のParentにおいてCP得点が約18%、A得点では約18.5%と学業優良群に比べて顕著に低くなっている。特にAは全調査対象群の中で最も低い。その結果、学業優良群のプロフィールがAをピークとする、なだらかな山型であるが、学業不良群のそれはFC、NPを山とし、Aを谷とする典型的なM型を示す。

〔考察〕

学業優良群の平均E・Gから推察するとAをピークとしてバランスがよくとれているため、それぞれの自我状態の本来の機能が状況に適してうまく発揮されているように見受けられる。

これに対し学業不良群ではCPとAが著しく低く、FCをピークとするM型のE・Gプロフィールとなっているため、主体性があり率直で明るく対人適応にもすぐれているが物事を筋道立てて考えたりきちんとけじめをつけることが不得手で、感覚的な状況判断から軽率な行動を起こしやすいものと思われる。またAが全調査対象群の中で最も低値であることから、合理的な現実処理が出来ずに失敗を繰り返すタイプが多いと推察される。

4) 化工88年度生について

構造的にはP、A、Cの全得点において学業不良群が学業優良群より低くなっているが、特にPが約12%と著しく低い。

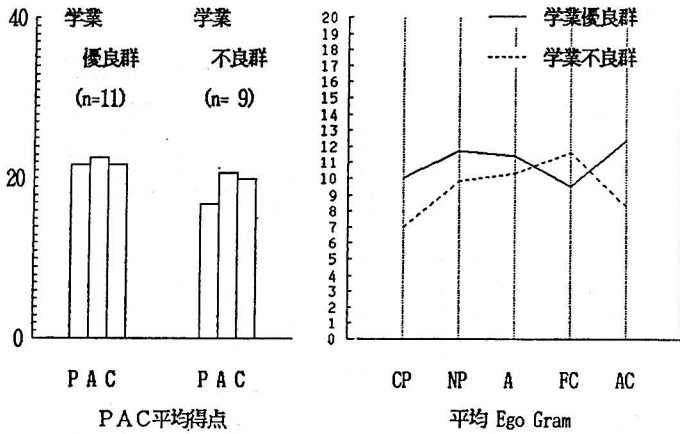


図4 化工88年度生

機能的には学業不良群の Parent において对学業優良群比が CP, NP どちらも明らかに低いが、特に CP 得点が約15%も低くなっている。また Child においては学業優良群では約15% AC > FC で、FC がクレパス状に落ち込んだ AC ピークの E・G プロフィールを示すが、学業不良群では逆に約15.5%も FC > AC となって FC ピークの左下がりのなだらかな山型プロフィールとなっている。

〔考察〕

学業優良群においては自我構造的に A 主導型であるため物事を現実認識に基づいて処理し客観的に状況判断できるようだ。自我機能的には AC > FC で、優良群にはめずらしい AC ピークの E・G プロフィールを描くため主体的に関わるよりも与えられたことを忍耐強く受動的に黙々とこなす生真面目で努力型という印象が強いと言えよう。

学業不良群においては機能的にみると FC をピークとする左下がりの山型の E・G プロフィールとなっているため率直で明い理想を持ってその実現に努力するといった目標意識が希薄で、感情欲求のままに羽目はずし過ぎたり、けじめのないルーズな行動に流される傾向が伺える。

5) 建築88年度生について

構造的には学業優良群で A が 27.0 という高得点を示し、対 P で約 14.5%，対 C で約 17.5% も高い顕著な A 主導型を示す。これに対し学業不良群では A と C の関係が逆転し約 11.5% C > A となった顕著な C 主導型を示す。

機能的にみると Child において FC には両群に目立った違いは認められないが AC が約 30% という大差で学業不良群 > 学業優良群の関係を示している。その結果、同

大学生の Ego gram 第2報

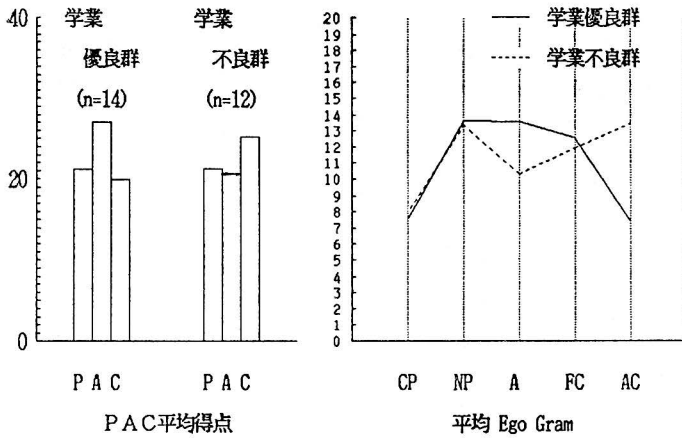


図5 建築88年度生

学科の87年度生と同様に学業不良群の平均E・GプロフィールがACをピークとしCP, Aを谷とするN型に近く学業優良群ではCPとACの両袖が下がった台形のプロフィールを示している。

〔考察〕

学業優良群を構造的にみると顕著な Adult 主導型で、機能的な平均E・GもCP, ACの両袖の下がった台形のプロフィールとなっているため、社会や組織への順応性にはやや欠けるが Adult 的的確な状況判断力や現実適応力, FCの主体的で創造的な行動力, NPのポジティブな対人コミュニケーション態度などがうまくバランスしており学業と遊びをうまく両立し生活をエンジョイできるタイプと言えよう。

学業不良群においては構造的にも機能的にも同科の87年度生の学業不良群と類似しているため、主体性に欠けた依存的受動的傾向, 自他規制に弱くルーズ, ずさん場当たりといった傾向が目立つように思われる。

6) 電気89年度生について

構造的には両群ともA主導型の構造を示しており、格別なちがいはないが学業優良群においてA得点が高くなっている。

機能的には両群とも Parent でNP>CP, Child でFC>ACの関係にあるが、学業不良群は学業優良群に比べてその差がはげしく、どちらも3倍以上となっている。その結果、学業優良群の平均E・GのプロフィールがAをピークとするなだらかな山型であるのに対して学業不良群ではFC, NPを山としCP, A, ACを谷とするM型となっている。

〔考察〕

構造的には両群の顕著な相違は認められないが機能的にみると学業優良群において

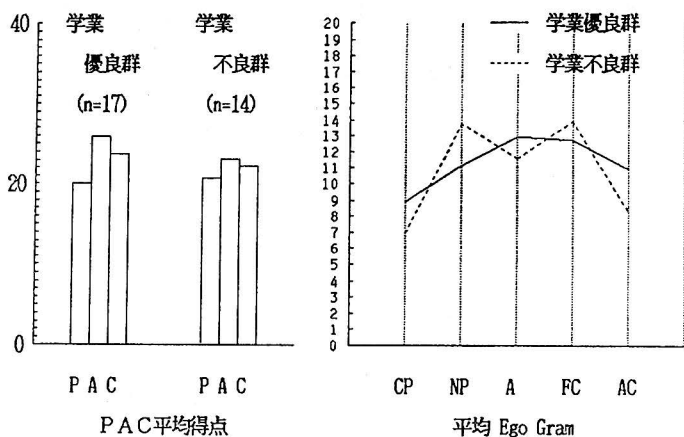


図6 電気89年度生

はAをピークとするなだらかな山型プロフィールとなっており機械88年度生同様にAdultのコントロールがよく行き届いてそれぞれの自我状態がバランスよく状況に応じて本来の機能を発揮できる傾向にあると言えよう。

これは対して学業不良群ではCP < NP, FC > ACが顕著な典型的M型のE・Gプロフィールとなっているため、機械88年度生の学業不良群同様に率直で明るく思いやりはあるが、自己中心的なわがままから行動を起こしやすく、物事を筋道立てて考えたり、目標を持ってきちんとけじめをつけることが不得手で軽率に流される傾向が見受けられる。

7) 情報89年度生について

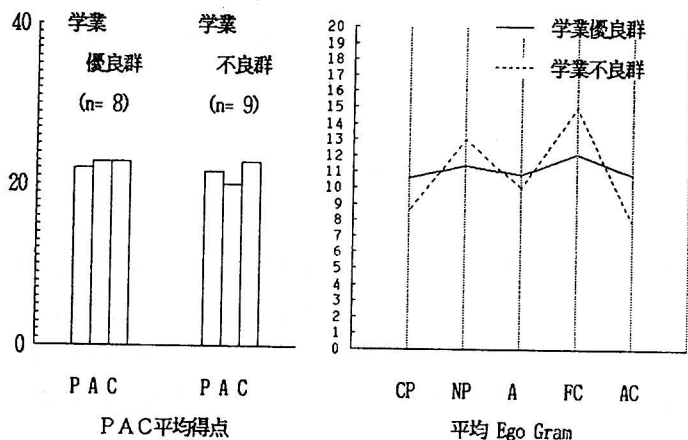


図7 情報89年度生

構造的には学業優良群においてややPボトムを示すのに対して学業不良群ではAが

約5%低くなったAボトムとするC主導型を示す。

機能的には Parent において学業優良群のCP, NPにはほとんど差はないが学業不良群では約22.5%差でNP>CPとなっている。Child においても学業優良群ではFCの得点がACの得点をわずかに5%上回るにとどまっているが学業不良群では約35.5%もFC>ACとなっており、その隔差が目立つ。その結果学業優良群のE・Gは、ほとんどフラットなプロフィールを描いているのに対し、学業不良群ではFCの優位度が顕著なM型のプロフィールを示している。

〔考察〕

学業優良群のPボトムにしる学業不良群のC主導型にしる構造的な相違を指摘できるほどのものはない。しかし機能的にみると学業優良群の平均E・Gがほぼフラットに近いプロフィールを示し、全自我状態がバランスよく状況に応じて本来的に機能しているように伺える。これに対して学業不良群では機械88年度生の学業不良群同様に典型的なM型となっている。したがって Parent においてはCP>NPが顕著なため自他規制に弱くルーズなけじめのなさが伺える。また Child においてはFC>ACが極めて顕著であるため主体的能動的ではあるが軽率で度を過ぎやすい傾向が伺える。また、これらの調整機能を持つ Adult の自我状態が相対的に低いため、優位なFCに影響されやすく情緒的判断から場当たりでずさんな行動選択に流される傾向が強いようである。

8) 建築89年度生について

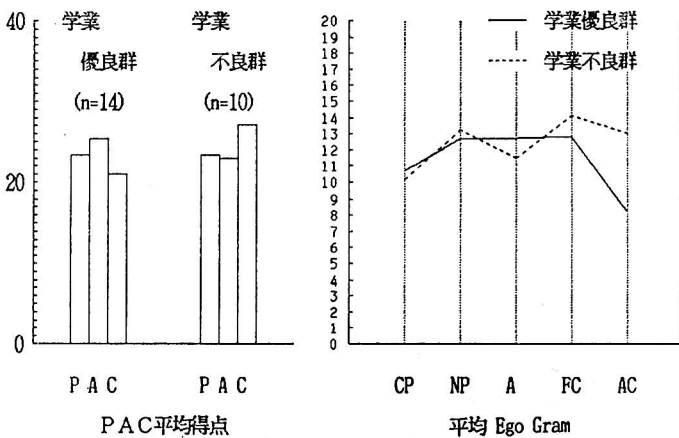


図8 建築89年度生

構造的には学業優良群においてAピークではあるがCのボトム傾向が目立つ。学業不良群ではC得点27と他より約15%も高い顕著なC主導型を示している。

機能的には Child で両群の明確な差異をみせている。学業不良群において F C, A C 両機能とも学業優良群のそれを上回っているが A C の得点差が著しく約 4.8 と F C の得点差約 1.3 の 3.7 倍ほどになっている。その結果平均 E・G プロフィールは学業不良群ではやや右上がりのなだらかな型を示し、学業優良群においては右下がりの台形のプロフィールを示している。

〔考 察〕

学業優良群においては構造的にも機能的にも同じ建築 88 年度生の学業優良群と類似した形状を示すため、そこから推察される行動特性も類似しているものと思われる。

学業不良群においては構造的には同科の 88 年度生の学業不良群と類似しているが、機能的にみると Child の自我状態において $FC > AC$ となり、結果として N 型よりも M 型に近い E・G プロフィールを描いている。そのため自他規制に甘くルーズでずさん場当たりな行動傾向は類似するが、A C の依存的受動的な面については他科の学業不良群と比べるとかなり目立つが同科の 87, 8 年度生と比べると顕著ではない。

9) Total 対照群について

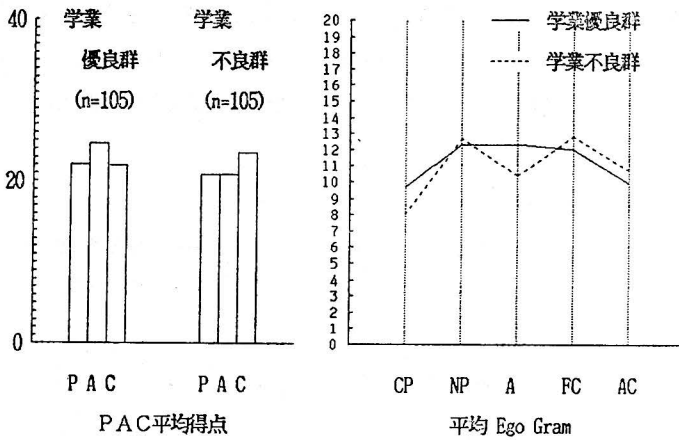


図 9 Total 対照群

各学科・各入学年度毎の学業優良群と学業不良群をそれぞれに総合的にまとめ、トータル PAC 平均得点および平均 E・G を出した。その結果構造的には学業優良群では A 主導型、学業不良群では C 主導型を示した。

機能的にみると学業優良群においては CP と AC の両袖がやや下がった台形の E・G プロフィールを示すのに対し、学業不良群においては CP ボトムの目立つ M 型プロフィールとなっており、学業優良群に対して A の落差が約 10% と目立つ。

〔考察〕

学業優良群においては、構造的にA主導型で機能的にも台形のプロフィールとなっているため Adult の自我状態から現実を客観的に把握でき、あらゆる角度から情報を収集し、冷静に状況を判断しながらNPやFCの自我機能をうまく発揮して周囲と暖かい交流を保ちながら自己実現に向かう健全なタイプといえよう。

これに対し学業不良群においては、CPとAの自我機能が低くなっているために厳格さに欠け、理想に向かって努力をすることが少なく、現実処理機能に欠けるために衝動的に振る舞ったり、場当たりでずさんな行動傾向が伺える。

4. まとめ

九大式E・Gを実施した受講生の中から学業成績・単位修得状況の集計表により学科および入学年度毎に学業優良群と学業不良群を選別し、両群のPAC平均得点と平均E・Gを比較検討し自我状態からの行動特性のちがいについて考察した。この考察の結果をまとめると次のようになる。

1) 総合的にみると、学業優良群においては、台形のE・Gプロフィールを示し、冷静に現実の状況を判断しながら、うまく自己の願望を満たしつつ、周囲との暖かな交流のできる自我状態のバランスのよい健全なタイプの者が多いと推察された。

これに対し、学業不良群はCPとAの自我機能が目立って低いM型のE・Gプロフィールを示すため精神的にやや未熟で、厳格さや目標意識に欠け、合理的な現実処理機能が低いために、自己内部からの衝動に振り回されやすく、ルーズで気ままな生活スタイルのタイプの者が多いように思われた。

2) 学科により平均のE・Gプロフィールに特徴があり、機械・電気・情報は、総合的な学業優良群、学業不良群とにそれぞれほぼ類似した傾向が見受けられたが、建築と化工に特異な傾向が伺え、両学科間に対照的なちがいがみられた。

3) 建築は、他の学科と比べると学業不良群においてACの自我機能が高く、主体性に欠け、依存的受動的な傾向が強く、相対的に高いNPの自我機能と相まって自己否定他者肯定的な対人態度から自己を犠牲にして他者にサービスをしてしまうといったお人好しなタイプが多いように思われた。したがって建築学科は、他の学科に比べて主体的、能動的な学習態度が特に要求される学科のように推察された。

4) 化工は、学業優良群と学業不良群の平均E・Gの比較において、他学科とは著しく異なる特徴を表している。その一つは、学業不良群において、他科に比しNPが低いため、FC優位とする左下がりの山型プロフィールを示し、明るく奔放であるが、

わがままで自己中心的傾向が強く、周囲の状況に合わせて一時的に我慢したり、目標達成のために自己欲求を抑えて、ねばり強く対処するのが苦手なタイプが多いように推察された。

また、学業優良群は、唯一FCがクレパス状に落ち込んだAC優位なE・Gプロフィールとなっており、主体性に欠けるが変化に乏しい仕事に対しても忍耐強く、生真面目にかかわることができる努力型のタイプが多いようであった。したがって化学工学科は、他の学科と比べて地道な根気のよい学習努力の態度が特に要求される学科のように思われた。

参考文献

1. J. M. Dusey (新里訳)「エゴグラム」創元社 1980
2. E. Berne (杉田訳)「交流分析と心身症」医歯薬出版 1973
3. M. James & D. Jongewad (深沢訳)「自己実現への道」社会思想社 1976
4. 末松弘行 (他)「エゴグラム・パターン」金子書房 1989
5. 福島 寛「エゴグラムで性格を知る本」JICC 出版局 1986
6. 新里里春 (他)「交流分析とエゴグラム」チーム医療 1986
7. 松波慎介「競技者の自我状態と競技行動」工学院大学研究論叢18号 1980
8. 松波慎介「エゴグラムによる競技行動の分析」工学院大学研究論叢20号 1983
9. 松波慎介「自我状態からみた指導者と選手の関係」工学院大学研究論叢21号 1983
10. 松波慎介「大学生の Egogram に関する考察」工学院大学研究論叢26号 1988

(まつなみ しんすけ 本学助教授 共通)